

9月11日(金) 研究発表1 第8室(T402)

大学英語教育における技能別見地からのESP

看護教育課程における意識の変化について

An investigation on the language attitudes change
of nursing students from the view point of ESP

広島県立保健福祉短期大学

Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

本岡 直子

Naoko Motooka

1.はじめに

本研究は、大学英語教育におけるESPのあり方を、医療系短期大学（特に看護学科）の教育課程において探るものである。大学入学時に行った意識調査と1年半後に行った学生の意識調査の分析をもとに、専門科目を学習する上での英語力および英語学習の必要性を明らかにすることを目的とする。また、卒業後の希望進路により学生の英語学習に対するあり方に違いがあるかどうかということに対してもふれる。

本発表では特に、

- 1) 学生と専門分野担当教員との意識の違い
- 2) 専門教科を学習する過程での学生の認識の変化
- 3) 学習者の認識と卒業後の希望進路との関係

の3点について、明らかにすることを目的とする。

2.調査方法

公立医療短期大学入学直後、およびその1年半後（2年生10月）の2回、アンケート調査を行った。アンケート対象者は看護学科90名。また、入学直後に行ったアンケートと同時期に、専門分野を担当する教員17名に対してもアンケート調査を行った。

3.結果

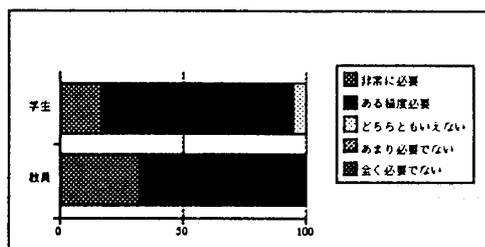
- 1) 学生と専門分野担当教員との意識の違い
 - a. 英語の必要性に対する意識
 - b. 看護の分野で必要な技能
 - c. 大学で学習すべき技能
- 2) 専門教科を学習する課程での学生の認識の変化（入学当時と1年半後の意識の比較）
 - a. 英語以外の授業における英語の必要性に対する意識
 - b. 大学で学習すべき技能
 - c. 卒業後の英語の必要性
- 3) 学習者の認識と卒業後の希望進路の関係（進学希望者と就職希望者の意識の比較）
 - a. 英語の必要性に対する認識
 - b. 大学で学習すべき技能
 - c. 卒業後の英語の必要性

4.結論

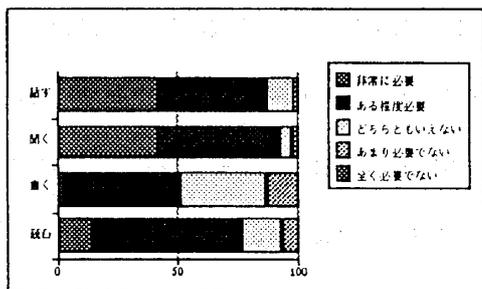
学習者の進路希望による違いは、質的な違いではなくむしろ量的な違いといえる。専門教育が進んでもESPに対しての必要性が生まれていない。むしろ英語の必要性は薄まっている。英語教育と専門教育の連携がうまくいっていない可能性が考えられる。

5.今後の課題

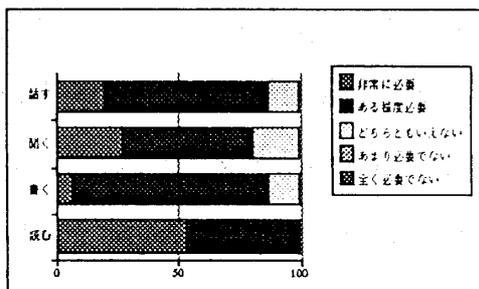
資料1



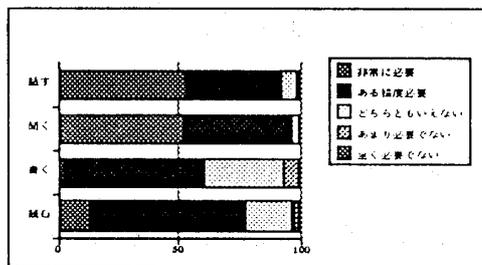
資料2-1 どのような技能が必要か (学生)



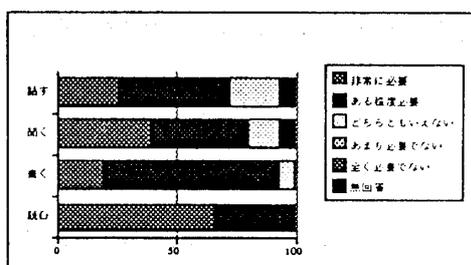
資料2-2 どのような技能が必要か (教員)



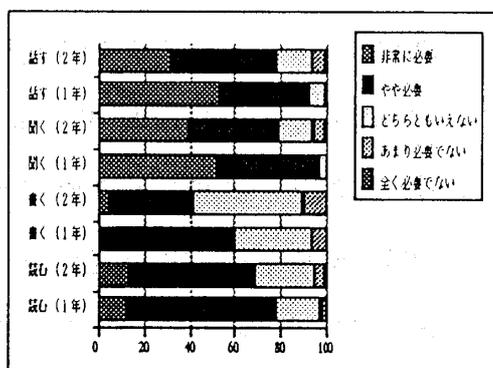
資料3-1 重点を置くべき技能 (学生)



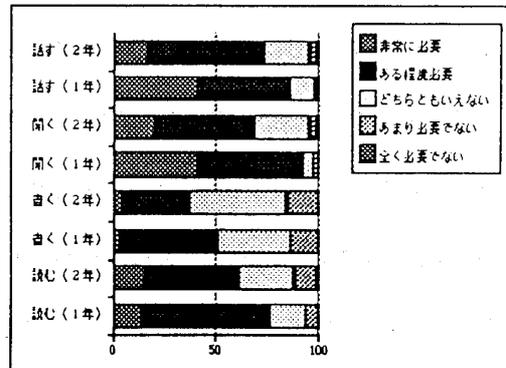
資料3-2 重点を置くべき技能 (教員)



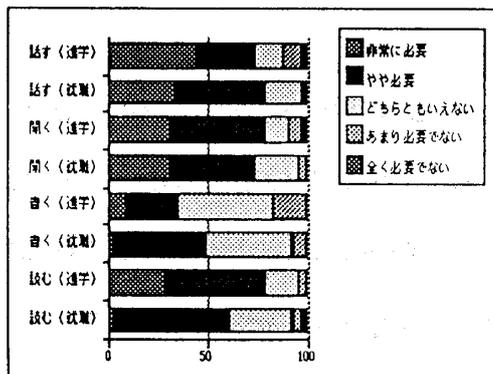
資料4 大学で学習すべき技能 (学年別比較)



資料5 卒業後必要な技能 (学年別比較)



資料6 大学で学習すべき技能 (進路別比較)



資料7 卒業後必要な技能 (進路別比較)

